戦国合戦図の基礎的研究

―兵庫県立歴史博物館所蔵「播磨三木城合戦図」の場合―

堀　新

はじめに

天正六年（一五七八）三月～同八年正月におよぶ播磨国三木城攻防戦は、戦国期の籠城戦を代表するものである[1]。三木城城主は別所長治で、これを攻め囲んだのは織田信長の部将羽柴秀吉である。後年、秀吉は「三木の干殺（ほし）、鳥取のかつやかし（飢）ころし、（中略）高松城を水責（攻）ニさせられ、太刀も刀も不入（いらず）」と豪語している[2]。また城兵の助命を条件に城主別所長治が切腹したことは、「一人による犠牲死」[3]として注目されてきた。この点は、開城後に城兵たちが虐殺されたとする新見解[4]もあり、さらに追求されるべきであろう[5]。秀吉の御伽衆大村由己による秀吉の伝記『天正記』は、三木合戦を対象とした「播州御征伐之事」[6]で始まる。このように、三木合戦は秀吉の出世物語の起点となる戦いである。この秀吉側史料に対して、別所家臣の来野弥一右衛門による「別所長治記」[7]があり、敵味方双方からの視点による検証が可能な稀有な合戦である。またこの三木合戦には「三木合戦軍図」と通称される三幅（右幅・中幅・左幅）の合戦図がある。戦国合戦図としては珍しく絵解きの材料となっており、別所長治の菩提寺である法界寺で現在も行われている。その絵解き台本があり[8]、近年の絵解きの動画もある[9]。また三木城包囲に際して多くの付城が造築されており、それらの発掘調査とその成果[10]なしには三木合戦の全貌を把握することは難しい。従って三木合戦は、歴史学・考古学・文学・美術史学による学際的なアプローチが必要な題材であるといえよう。

筆者は近年、歴史学・文学・美術史学による学際的研究を進めてきた[11]。そのなかで特に三木合戦に注目しており、一次史料（古文書）と二次史料（軍記・合戦図）双方を使用して実像への接近を試み、あわせて両者の関係性を粗描したことがある（堀A）。特に合戦図など絵画資料の読み解きは素人には難しく、いまだに初学者の域を出ないが、歴史学からのアプローチにもそれなりの意義があると考えている。その通称「三木合戦軍図」であるが、その概要をまとめたことがある[12]。それによれば、法界寺所蔵原本（旧図と呼ぶ）の他に三種の写がある。このうち兵庫県立歴史博物館所蔵「播磨三木城合戦図」（本図と呼ぶ）は粉本であり、夥しい色指定の書き込みがある。さらには旧図も含めて他本にはない場面解説や人名・地名が多数書き込まれており、これらは全て同筆と思われる。すなわち本図は戦国合戦図の作成経緯が判明し、図像を正確に理解する

ことができる貴重な資料として注目される。そこで本稿は、本図の夥しい書き込みのうち、場面解説や人名・地名などの書き込みを検討し、これをもとに「三木合戦軍図」の図像を分析し、合戦の実像と比較したい。

一　本図の書き込み内容

本図への書き込みは図1～3[13]に記した数字の箇所にある。まずその書き込みを翻刻するが、これには墨筆と朱筆があり、抹消・訂正もある。以下の翻刻では朱筆をゴチック体で記して墨筆と区別する。

1　右幅（三二ヶ所）

1平井山秀吉城（羽柴）　2秀吉平山（井脇カ）合戦ヲ見ル　3信忠公（織田）　4秀吉公　5浅野（長吉）　6三木ゟ使者　7秀吉方役人　8治定（別所）　殿東ノ山合ゟ秀吉陣（陣）へ責上（攻）　9丹生山　10淡河城　11淡河タン正（定範）　12宮長樫之介　13秀吉方　14別所小八郎（治定）殿七百六十三人扣（控）　15小八郎治定公　16秀吉公　17清水弥四郎　18久米五郎　19敵五十人計治定殿ヲマネク（招）　20治定殿大ニ敵打取、引替（返）サントス　21小性（姓）本江采女　22樋口太郎23治定殿　24樋口か郎トウ（党）　25三木方広瀬左衛門　26治定殿死体前ニテ従類十七騎自害　27依藤弥太郎　28飯尾吉左衛門　29三木川広瀬　30押辺谷通路、明石ゟ三木城へ五里31明石魚住城　32明石魚住湊、毛利家兵粮ヲ三木へ送ル処

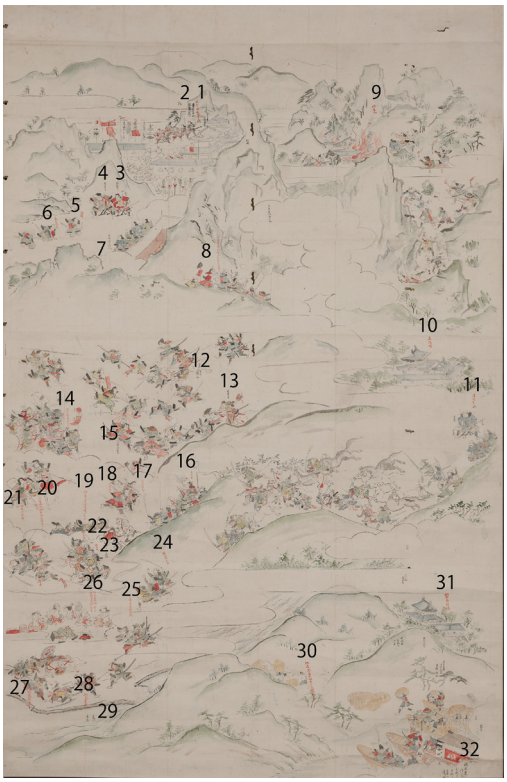

図1　右幅の書き込み

右幅の書き込み三二ヶ所の内容内訳は、人名一九ヶ所（約59％）、地名七ヶ所（約22％）、場面説明六ヶ所（約19％）である。文字の色は墨筆九ヶ所、朱筆二三ヶ所で、圧倒的に朱筆が多い。墨筆九ヶ所のうち六ヶ所（約67％）は人名である。朱筆における人名の割合（約57％）よりも若干高いが、さほど深い意味はなさそうである。墨筆と朱筆は同筆のように思われるが、書き込み時間の前後があるかどうかはわからない。色指定の書き込みは全て墨筆であることから、墨筆が先、その後に朱筆と考えられそうではある。しかし次節の中幅で述べるように、そう単純ではない。

2　中幅（五二ヶ所）

1秀吉平田ノ合戦ヲ聞、馳出ス処　2平井山合戦ノ時、平井山（抹消線は墨筆）
ゟ秀吉公三木城ヲ責ル　3大膳（谷衛好）討死注進ノ使　4秀吉方催促（抹消線は墨筆）
ノ使者　5別所左近（治房）　6淡河弾正（定範）　7長剱咽喉ヲ突タル者
歟　8押辺（部）弥太郎　9室野小太郎　10谷大膳　11神吉方
12別所山城（吉親）　13別所左近　小野権右衛門　櫛橋源五三　足軽大
将富田内匠　14其外高橋源左衛門　神沢民部　加古右京　大村
九郎右衛門　小寺若狭　広置藤九郎　15保隅越中　岡村因幡
16三木方先陳　17三木城　18秀吉公　19長張（長治）公　平山合戦
評定　20治定　21友之　22別（別所）左近　23三宅肥前（治忠）　24
山城　25別甚太夫　別三太夫　光枝小太郎　神沢民部　26清
水弥四郎　久米五郎　横山将監　27長治公　28初発秀吉公へ
ノ審否決断（朱筆による抹消）ノ処　29山城　30別甚太夫　31光枝小太郎　別
左近　別志摩守　32肥前　33光枝道碩　34友之　35長治公扈従林辰之介　36治定　37秀吉公ゟ返簡ニ酒肴へ添送処　38使者
39受方　40家中暇乞ノ盃　41女中方暇乞　42長張（治）公御台簾子方（抹消線は朱筆）（連枝）　43長張（治）公　44彦之進（友之）　45彦之進御台簾（抹消線は朱筆）（連枝）　46長張（治）公　彦之進
47三枝（抹消線は朱筆）肥前（宅）　48鷹ノ尾大手門合戦　49三木方役人　50秀吉方ノ役人　検使　51長張公家臣林辰之介　52此山三木城ゟ南ニ□（在カ）

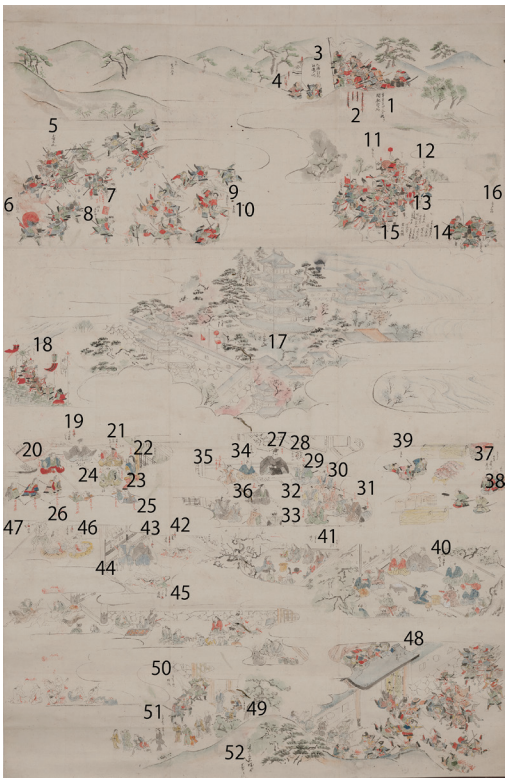

図２　中幅の書き込み

中幅の書き込み五二ヶ所の内容内訳は、人名三九ヶ所（75％）、地名二ヶ所（約４％）、場面解説一一ヶ所（約21％）である。文字の色は墨筆二六ヶ所、墨筆に朱訂正があるもの六ヶ所、朱筆一七ヶ所、朱筆を墨筆で抹消したもの三ヶ所である。中幅の特徴は、書き込み点数が多いこと、しかもその大半が人名であることである。また墨筆・朱筆それぞれに訂正があり、しかも墨筆の訂正には墨筆が使用されている点も特徴である。墨筆と朱筆がともに訂正に用いられていることからすると、墨筆と朱筆はほぼ同時に使用されていたのではないかとも考えられる。そしてその訂正内容は、墨筆を朱筆で訂正した七ヶ所のうち六ヶ所が人名、残る一ヶ所が場面解説である。人名は四ヶ所が別所長治に関するもので、「長張」とあるのを「長治」と訂正したものである。もう一ヶ所は別所長治・友之兄弟を介錯した家老三宅肥前入道治忠が「三枝」とあるのを「三宅」と訂正したものである。いずれも単純な人名誤記であり、そのままでも着色に不都合はないと思われるが、いずれも重要人物であるためにあえて訂正したのであろう。しかし「簾子」を「連枝」とする訂正二ヶ所は、着色にほとんど関係ないであろう。にも関わらず訂正

した理由に、本図をもとに制作される新たな合戦図には、画中に人名が記される予定だった可能性もある。

3　左幅（三七ヶ所）

1大村　谷大膳（衛好）　秀吉方　2仕（志）方ノ城　3大村夜討ノ処　中国・東国入乱　二度目　4神吉（かんき）ノ城　5別所三太夫　6大村合戦初発　7別所甚太夫　8長張（ママ）公　9太閤方敗軍ニ及、散乱ノ処　10神沢民部（頼定）　11民部出陣ヶ帰、休足ノ処　12民部出陣（禅吉）　13梶原（冬庵）　14神吉合戦　15神吉民部　16神吉民部乗馬　17敵方敗軍　18秀（織田信忠カ）忠　19民部首　20藤太夫（神吉）　21梶原　22野口　23秀吉公　24別所山城守（吉親）　25三宅肥前（治忠）　26山城・肥前両馬　27大手口　28野口合戦　29太閤方　30太閤方　31野口城主長井四郎左衛門　32生木大明神　33虚空山　34虚空山法界寺　35御廟所　36十二村ノ百姓共　37因幡ノ城主稲毛禅定坊（宮部）（善祥坊継潤）　秀吉方ノ寄セ城

左幅への書き込みは墨筆のみであること、訂正・抹消がないことが特徴である。ちなみに中幅では全て訂正された「長張」表記が一ヶ所あるものの、この左幅では訂正されていない。書き込み三七ヶ所の内容内訳は、人名一五ヶ所（約41％）、地名八ヶ所（約21％）、場面解説一〇ヶ所（約27％）の他に、馬と寺社がそれぞれ二ヶ所（5％）ある（端数を四捨五入しているため合計100％にはならない）。描かれた図像によるものではあるが、馬と寺社への書き込みもまた左幅の特徴である。

以上の右幅・中幅・左幅の書き込み内容を数値化したのが表1である。

二　本図に描かれた内容

前章に翻刻した書き込み内容を手掛かりにして、各図像が三木合戦のどの場面を描いているのかを検討する。検証の過程で「播州」「長治記」「絵解き」を随時参照して図像理解の一助と

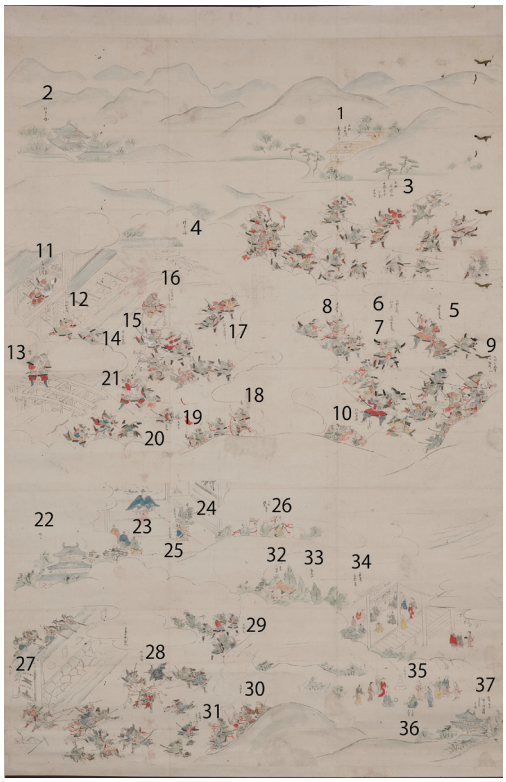

図３　左幅の書き込み

右図	人名	地名	場面	計
墨筆	6	1	2	9
朱筆	13	4	6	23
計	19	5	8	32

中図	人名	地名	場面	計
墨筆	18	1	7	26
墨筆朱訂正	6	0	1	7
朱筆	16	0	1	17
朱筆墨抹消	0	0	2	2
計	40	1	11	52

左図	人名	地名	場面	馬	寺社	計
墨筆	15	8	10	2	2	37

表１　書き込み内容の比較

する。その一方でこれらとの食い違いも出てくるが、それらについては次章で検討する。なおアルファベット下のカッコ内の数字は、書き込み番号を示す。

1　右幅（A～F）

右幅の場面は、A～Fの六つに分けられる。

A（1・2）平井山秀吉本陣　B（3～7）別所方の降伏申し入れ　C（9）丹生山合戦　D（10・11）淡河城と淡河定範、淡河城合戦　E（8、12～29）平井山合戦　F（30～32）明石魚住城と魚住湊から兵粮を運ぶ毛利勢

この画面構成をまとめたのが表2である。右幅で最も大きく描かれているのがE平井山合戦であることは一目瞭然であろう。これをさらに細分化すれば、14が精鋭七百六十三人を率いて出陣するこの日の総大将別所小八郎治定（長治の弟）である。「絵解き」ではこの人物を別所山城守吉親とするが、こうした相違点については後に検討する。15が鑓を振るって敵を倒す治定、12が敵を倒す宮長樫之介、13が別所方を迎え撃つ秀吉方の軍勢である。多くの敵を討ち取った治定は退こうとするが、19は治定を呼び戻そうとする秀吉方約五十人（描かれているのは四人）である。20が引き返そうとする治定、21がこれを止めようとする小姓本江采女である。23が再び奮戦して敵の首を取ろうとする治定、24がその背後から襲いかかる樋口太郎（羽柴秀長家臣）で、治定は樋口の右足を斬り落とす。24はそれを見た樋口の郎党が治定に襲いかかろうとするところである。ここで治定は討ち取られてしまうが、その様子は描かれていない。26は治定の亡骸と兜の前で切腹する十七騎（描かれているのは五人）の家臣たちである。17・18は偽って味方の首を手にして秀吉本陣に潜入しようとする清水弥四郎と久米五郎で、16が秀吉である。清水と久米は見破られて討ち取られるが、その様子は描かれていない。その他、25・27・28は奮戦する別所勢である。以上のように、平井山合戦は総大将別所治定が討死する敗北であったが、描かれているのは別所方の奮戦ぶりばかりである。

右幅に描かれた場面のうち年代がはっきりしているものは、Bが天正八年正月一五日、Cが天正七年五月二五日、Dが天正七年五月二六日、Eが天正六年一〇月二二日（軍記は天正七年二月六日とする）、Fが天正七年七月である。場面構成は時間的経過とは無関係であり、結論を先に言

表２　右幅の画面構成
（T7.5.25は天正7年5月25日を表す。以下同じ）

えば、現実の地理的関係を基本として構成されている[14]。

2　中幅（a～g）

中幅の場面は、a～gの七つに分けられる。

a（1～16）平田大村合戦　b（17）三木城　c（18）三木城を攻める羽柴秀吉　d（19～26）平井山合戦の評定　e（27～36）三木城での最初の評定　f（37～47、49～52）三木落城　g（48）鷹尾（たかのお）山城合戦

この画面構成をまとめたのが表3である。中幅はa平田大村合戦とf三木落城が大きく描かれている。ではまずa平田大村合戦から細分化しよう。1～3は別所方の平田・大村襲撃を聞いて秀吉が出陣しようとするところである。2・4は朱筆を墨筆で抹消しているが、この点は後に検討する。別所方は5～10と11～16の二つの集団として描かれている。前者は秀吉方の谷大膳衛好の平田砦を攻撃したが、これを率いたのは5別所左近治房（長治の叔父）らしい。これには6淡河弾正定範、8押辺（部）弥太郎が加わり、9室野小太郎が10谷大膳衛好を討ち取った。別所方はこの勢いに乗って、平田砦を攻略する。いっぽう後者は12別所山城守吉親が率いたのだろうか。これには11神吉方の将兵が加わり、13～15に十二名の武将名が書き込まれている。このうち13に別所左近治房の名前もあるから、平田砦の守備兵を残して前者の軍勢から合流したのであろう。16は別所方の先陣である。この戦いで6淡河弾正定範は討死するが、主従五騎が差し違えて死んだふりをし、そこに近づいた敵五人の膝を斬り落とし、残る敵を四方に追い払ったうえで、敵の首を膝の上に抱えて腹を切ったという。8押辺（部）弥太郎は淡河家臣ではないが、敵の膝を斬る様子が描かれている。しかし、淡河主従五騎の切腹場面は描かれていない。結局この平田大村合戦で別所方は別所甚太夫・同三太夫以下大将分十人が討死し（「播州」）、秀吉は「首四百八ツ討捕」ったと述べている[15]。それにも関わらず、ここでも別所方の奮戦ぶりが強調されている。なお平田大村合戦は左幅にも描かれている。

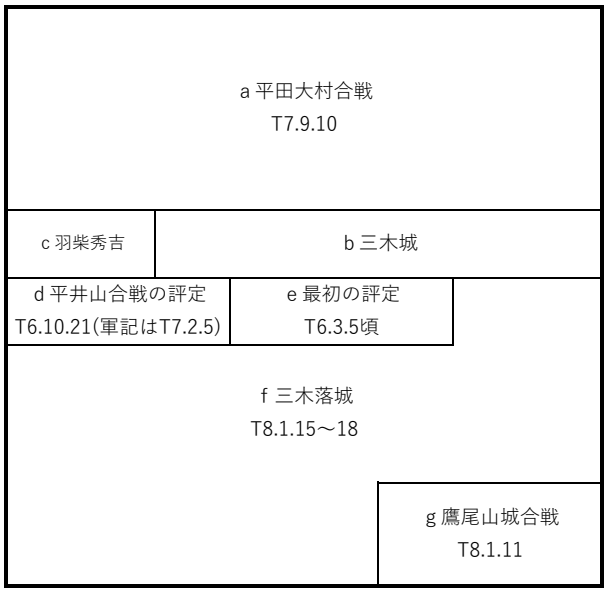

表3　中幅の画面構成

続いてf三木落城であるが、これは右幅Bからの続きである。自らの命と引き替えに城兵の助命を嘆願する別所長治に秀吉は感嘆し、酒肴を三木城中へ贈る。それが37～39である。それを受けて、40家中の男も41妻子も暇乞いの酒宴を張る。そして翌日42長治の妻子、45彦之進友之（長治

の弟）の妻子が自害する。43長治と44彦之進友之はそれを確認した上で、切腹する様子が46である。兄弟の介錯をしたのは、47家老の三宅肥前守治忠である。三宅もこの後に自害する。この他、文字の書き込みがないので番号が付いていないが、籠城中の将兵が馬や犬を食べる情景が描かれている。この情景の右部分には肉を焼く者、鼠を捌く者が描かれているほか、衰弱して鎧を着れない者、切腹する者四名も描かれている。切腹する者はこれ以外にも中幅左下に七名が描かれており、これは兵粮がなくなったので切腹した老いたる武者であろうか。これに対して肉食している脇で切腹している者四名の姿は意味深である。三木城中では「人之肉」を食べたとする史料もあり[16]、このことを示唆しているようにも見える。別所長治・友之兄弟をはじめとする別所一族の自害により、城中の将兵および百姓たちは助命された。49～51は城中から出て下城する将兵や百姓たちを秀吉方の検使役人が両側に並んで見ている。城中の者たちの命が全員助かったかどうかは議論の分かれるところであるが、この当時の織田権力の方針は、裏切者は処刑であった。この翌年の鳥取城の場合は、下城する際に織田権力を裏切った者たちは差し留められている。この後の運命を明記する史料はないが、その結末は言うまでもなかろう。もちろん助命された者も少なくなく、だからこそ、別所長治は「諸人（もろびと）ノ命ニカハル（代）我身」（「播州」）と辞世の句を詠んだのである。下城する列の前方に51林辰之介がいるが、林はその手に長治の辞世の句を持っている。

g鷹尾山城合戦については、次章において他三種と画像比較しつつ検討するので、ここでは省略する。

中幅は年代がはっきりしているものが多く、a平田大村合戦が天正七年九月一〇日、d平井山合戦の評定が天正六年一〇月二一日（「長治記」など軍記は天正七年二月五日とする）、e最初の評定が天正六年三月五日頃、f三木城落城では秀吉から酒肴が贈られたのは天正八年正月一五日、家中・女中の暇乞いの酒宴は正月一五～一六日、別所一族の自害は正月一七日、城中から下城したのは正月一八日である。そしてg鷹尾砦の戦いは正月一一日である。場面はやはり年代順ではなく、おおむね実際の位置関係に沿っている。そして中幅の真ん中に三木城が描かれ、それに向かって軍勢を率いて押し寄せる秀吉の姿があるのもまた当然であろう。

3　左幅（ア～キ）

左幅の場面は、ア～キの七つに分けられる。

ア（番号なし）志方城　イ（4、11～21）神吉城合戦　ウ（1、3、5～10）平田大村合戦　エ（23～26）加古川評定　オ（27～31）野口合戦　カ（32

表４　左幅の画面構成

～36）法界寺での法要　キ（37）鷹尾山城合戦

この画面構成をまとめたのが表4である。左幅は中幅と続くウ平田大村合戦、イ神吉城合戦、オ野口合戦、カ法界寺での法要が大きく描かれている。また、三木合戦の発端であるエ加古川評定、戦後のカ法界寺での法要と、最初と最後の場面が描かれている。ではこれらの場面を細分化してみよう。

まずウ平田大村合戦であるが、1谷大膳の平田砦が山間にあり、3と5～10の二場面に分かれる。3周辺には二十五人の兵士が描かれているが、これは別所方が谷大膳衛好の平田砦を夜襲した場面である。別所方の三人の兵が松明をもっている。谷は主従八騎で迎え撃った（「長治記」）とされるが、ここには谷方の兵士が十二人描かれている。この場面には「中国（別所方）・東国（秀吉方）入乱二度目」と書き込みがあり、この下に描かれた5～10には「大村合戦初発」の書き込みがある。ここでは別所長治自ら出陣し、別所甚太夫・同三太夫・神沢民部大輔頼定が従っている。5三太夫は敵の首を右手で高く掲げ、振り返ってそれを8長治に見せているかのような姿である。7甚太夫はまさに敵の首を取るところ、10神沢の前には敵の死体が折り重なっており、9「太閤方敗軍」の様子として描かれている。後ろを振り返りながら逃げていく騎馬武者の脇には瓢箪の馬印が描かれており、これは秀吉のつもりなのであろうか。平田・大村合戦は秀吉方が「勝鬨ヲ取行」い、この後「三木方弥気ヲ失、重テ可レ戦便モナシ」とされるが（「長治記」）、実際は毛利方が三木城への兵粮搬入に成功した可能性もあり、秀吉方の一方的な勝利ではないとされる[17]。このような実像と虚像のなか、本図は別所方の優勢場面のみ描くというさらなる虚像を描いているのである。

続いて、イ神吉城合戦に移ろう。14神吉合戦とあり、12は城主の神吉民部大輔頼定が城門から出陣する様子である。城門の二階にも11神吉頼定の姿があり、その姿を「出陣今帰、休足（息）ノ処」と書き込みがあるが、これは出陣前に頼定が秀吉方に向かって名乗りを上げ、討死の覚悟を宣言した場面であろう（「長治記」）。ただし絵解きではこの場面を敵を「数をしらず討取て休息の処」とあり（「絵解き」）、本図の書き込みは軍記ではなく絵解き台本に沿っている可能性がある。この点は後に検討したい。そして15頼定は堀を渡って敵と戦う姿もあり、その脇には16頼定の馬も描かれている。本図にはそれ以上の解説（書き込み）はないが、これは頼定が門外で馬から下りて戦ったこと（「長治記」）を描いているのであろう。この頼定の働きにより、17退却する秀吉方の兵士が描かれている。しかし、19頼定の首が描かれ、その脇に20神吉藤大夫が正座している。藤大夫は頼定の家の子（「長治記」）、叔父とも甥とも伝わるが（「絵解き」）、このとき秀吉方に寝返って頼定の首を取って敵の大将18織田信忠の下に参じたのである。書き込みの18秀忠は、信忠と秀吉が混乱してしまったのであろう。いっぽう城門の脇では橋桁を外して立ちはだかる13梶原重右衛門入道冬庵が描かれている。さらに21梶原は橋を渡って敵の首を取っている。梶原が敵の首一つを取ったことは、「長治記」「絵解き」ともにある。21梶原の脇で城兵が敵兵を倒しているのは、頼定が敵に囲まれているのを見た城兵が、「大将ヲ討スナ続ケヤ」と出撃した場面（「長治記」）であろう。この神吉城合戦は秀吉方に攻略され、別所方の敗北である。神吉民部大輔頼定の首こそ描かれてはいるが、それは戦いに敗れてと言うより

も藤大夫の裏切りによるものである。戦いの場面ではこれもまた別所方の奮戦を強調した図像が目立つ。

次はエ加古川評定である。これは中国（毛利）攻めを主君織田信長から命じられた23秀吉が、播磨の諸将を集めて作戦会議を開いたものである。別所氏からは24別所山城守吉親（長治の叔父）と25三宅肥前守治忠（家老）が参加した。26はその二人の馬が繋がれている。「馬を繋ぐ」とは権力者に服従するという意味であるから、この時点では別所氏が秀吉に服従していたことを示しているのであろうか。この加古川評定で別所氏が提案した作戦を秀吉が罵倒し、これが別所氏謀叛の原因になったという（「長治記」）。

続いてオ野口合戦である。22野口城は三木城の周辺諸城で、最初に秀吉から攻撃された。播州一の名城とされる（「長治記」）。その下に27同城大手門が描かれ、城主長井四郎左衛門長重の軍勢が城壁の上から鉄砲と弓を射ている。その先には秀吉方の兵が倒れ、逃げる様子が描かれている。これは「城主四郎左衛門下知シテ、大筒ヲツルベテ一度ニ打立ケル間、寄手ノ大勢手負・死人将棋倒」した場面を描いているのであろう。また29太閤方の兵士は先頭の者が鎌を持ち、後ろの者たちは麦を担いでいる。これは「薙二畔（アタリノ）麦数万荷一、成二堀之埋草一」（「播州」）している情景を描いたものであろう。大手口には秀吉方に追いやられ、退却する長井方の兵が見える。そして30太閤方の武将（秀吉か）の前で兜を脱ぎ降参する31長井の姿が描かれている。なお野口合戦は四月三日に始まったとされるが（「長治記」）、秀吉方は少し手こずった後、「三日三夜入替／／攻戦」（「播州」）った結果、四月一二日に攻略する[18]。

最後にカ法界寺での法要を細分化しよう。32の生木神社は法界寺の鎮守（「絵解き」）、33は法界寺の山号、34が法界寺の伽藍である。法界寺は別所長治の遺骸を埋葬したが、35は御廟所で五輪塔が描かれている。この周りには36十二ヶ村の百姓がいる。本堂とその周辺には五人の僧侶、一三人の人物（別所旧臣とその一族か）が描かれており、どちらも別所長治の忌日における法要の場面であろう。このうち百姓たちの場面については次章で検討する。この場面が絵解きの最終場面である。

三　本図の図像の特徴

1　四種の図像比較

本図の特徴を検討する前に、本図を含む現存「三木合戦軍図」四種について簡単に述べておきたい。

まず旧図であるが、寺伝では寛永年間（一六二八―四四）に別所遺臣の来住（きし）景政が寄進したという。画風から一七世紀

	作　品　名	数量	法量（cm）	制作年代	絵師	所蔵	備　考
A	天正年間三木城合戦図（旧図）	三幅	各165×115	寛永年間(1628-44) 17世紀後半ヵ	不明	法界寺（三木市）	寛永年間(1628-44)に別所遺臣の来住安芸守景政が寄進と伝わる。
B	播州三木城天正中合戦図（新図）	三幅	各219×144	天保12年（1841）	中条竹趣（和）	法界寺（三木市）	天保12年(1841)に別所長治末裔の別所九兵衛長善が寄進と伝わる。
C	播磨三木城合戦図	三幅	各173×111.5	江戸時代	不明	兵庫県立歴史博物館	Aをもとにした粉本か。色指定、人名等の書き込みあり。
D	三木合戦図	三幅	未確認	明治初期	森魚淵(1830-1909)	三木文庫（徳島県）	明治初期にAを模写か。

表５　「三木合戦軍図」一覧

後半の制作とする説[19]もあるが、現在は寺宝として非公開であるためその是非を判断できない。この旧図を中条竹趣に写させて、別所末裔の別所長善が天保一二年（一八四一）に寄進したのが新図である。現在の絵解きはこの新図によって行われている。新図の制作経緯は庵逧巌氏の研究[20]に詳しい。新図は旧図を写したものであるが、旧図よりも一回り大きいため構図も全体的に少し伸びた印象があるほか、色彩も鮮やかである。旧図を正確にそのまま模写したものでもない。そのため堀Bで検討したように、本図が新図ではなく旧図を写したものであることがわかる。本図は平成一七年（二〇〇五）に兵庫県立歴史博物館が古書肆から購入したもので、それ以前の伝来は不明である[21]。三幅の他に「播州三木城地図」と「播州三木城合戦図略縁記」がセットになり、四巻一冊が木箱三つに納められている。しかし「播州三木城合戦図略縁記」はともかく、「播州三木城地図」は本来別のものであろう。最後の三木文庫本は、明治初年に阿波の絵師森魚淵（なぶち）が描いたもので、法界寺の原図を模写したものである[22]。色合いの違いから一見した印象はA・Bとも異なるが、構図はA～Dともにほぼ同じである。

堀Bは紙幅の関係で、右幅の平井山秀吉本陣についてのみ旧図・新図・本図の比較を行った。そこで本稿では中幅・左幅の一部を取り上げて四種の図像比較を行いたい[23]。中幅で取り上げるのは下端の鷹尾山城合戦である。

中幅g鷹尾山城合戦は、長治弟の別所彦之進友之の居城である鷹尾山城をめぐる合戦である。秀吉は天正八年正月一一日にこれを攻略した（「播州」「長治記」）。これによって落城が近いことを悟った長治は、秀吉に降伏を申し出た。すなわち、三木落城を最終的に決定づけた合戦である。大手門の上には四人の武士がいて、そのうちの二人は弓を射ている。この点は四種とも同じである。右端の采を振る武将は、大将の友之かも知れない。長篠合戦図屏風において、長篠城の城門脇の城壁の上から奥平信昌が采を振るったのと同じ構図である。そして問題になるのが、城門の下で活躍する武士である。不鮮明な画像もあるのでわかりにくいが、旧図・本図・三木

図４　鷹尾山城合戦の図像比較

文庫本はいずれも兜をしていない一人の兵士が右足を後ろに大きく上げて前のめりになりながら、背中を向けた敵兵の左側を両手で斬りつけている。これに対して新図は大手門の下に兜をしていない二人の兵士が描かれ、右側の兵士が背中を向けた敵兵の左側に刀をつけている。しかし、この兵士は右足を身体の前に出しており、体勢も前のめりではなく、後ろ足も上がっている様子はない。刀を持つ手も片手であり、敵に斬り付けるというよりは刺しているようにも見える。このように、新図だけが全く異なる図様なのである。

次に左幅カ法界寺での法要のうち、法界寺の百姓がお詣りする場面である。これは三木城周辺十二ヶ村の百姓たちで、彼らは別所氏家臣たちとともに三木城に籠城していた。籠城するのは武士だけではなく、百姓・町人たちもいるのである[24]。開城時の美談として、城主である別所長治が切腹することで場内の兵士や百姓の命が救われたのであるから、かれらが報恩の思いを持って長治を祀りお詣りするのは当然であろう。その百姓たちによる法要の場面であるが、新図のみ十四人（男九人、女五人）描かれているが、他はいずれも十一人（男七人、女四人）である。新図は五輪の塔が左端に寄っているが、他はいずれも真ん中に描いており、その方が自然であろう。他図では真ん中で座っている人物は二人で、彼らは向かい合って座っている。しかし新図では座っている人物は三人であり、五輪の塔に向かって二人が並んで手を合わせている。また他図では右端に少女が立っているが、新図では少女の脇に母親らしき女性が立っている。また、本堂内で行われている別所一族や遺臣たちによる法要についても、新図は人数が増えている。

以上、堀Bでの右幅に加えて、本稿では中幅・左幅の図像を比較した。四種のうち新図だけが他図とは微妙に異なる図像が描かれていることが明らかになった。ただし全体的な構図は変わることなく、描かれる人数が増え、それに伴って若干図様が変わっていた。そして、本図（兵庫歴博本）及び三木文庫本は旧図を模写していることはほぼ間違いない。新図の図様が若干他図と異なるのは、新図の法量が他図よりも大きいことから生じる空白を埋めるためであろうか。また図像とは別に、色彩の違いは大きいように見受けられる。これは顔料の差によるものであり、注文者がどこまで制作費用を出せるかという経済事情も関わっているのであろう。

図５　法界寺の百姓の図像比較

2　本図の書き込みと軍記・絵解き

「三木合戦軍図」の図像は「長治記」にもとづいており、「絵解き」の内容も同様と考えられてきた。しかし前章で述べたように、右幅E平井山合戦、左幅イ神吉城合戦の書き込み内容は「絵解き」とは異なっている。その点を詳しく検討する。

まずE平井山合戦であるが、別所方は二手に分かれ、それぞれ別所山城守吉親と別所小八郎治定が大将である。この点は「播州」「長治記」「絵解き」いずれも一致している。しかし本図右幅に吉親の姿はなく、これに対して治定は8・14・15・20・23と五ヶ所に描かれている。このうち「絵解き」と食い違っているのは8・14であり、その他は治定として問題ないであろう。そこでまず8であるが、書き込みは朱筆で「治定殿東ノ山合ゟ秀吉陳（陣）へ責上（攻）」とある。しかしこの図像は平井山の秀吉本陣に背を向けて山を下っており、とても平井山へ「責上」っているとは考えがたい。治定を示す甲冑や旗指物などもなく、これを治定に特定する積極的な根拠はなく、むしろ不自然である。「絵解き」はこれを「秀吉方、夜討に馴し屈強の兵三百余騎余（ママ）り、天正七年（一〇）一月、風雨の夜を待、彼敵（城に）へ押寄せ」とある。風雨こそ描いてはいないが、丹生山城の方向へ向かっており、「絵解き」通りに読む方が自然であろう。すなわち8をE平井山合戦からC丹生山合戦へ場面変更した方が合理的である。

次に右幅14であるが、朱筆で「別所小八郎殿（治定）七百六十三人扣（控）」とある。この日治定が率いた軍勢の数について、「播州」には明記なく、「長治記」には「武勇ノ者ヲスグリ七百余騎」、「絵解き」は「武勇の勝（スグレ）たる兵七百余騎を従（え）ひ」とある。ほぼ同じような数字ではあるが、七百六十三人という端数を伴う数字は他の軍記をみたが、やはりない。ただし、「長治記」は治定が総勢約七〇〇を率いるとある部分の前に別所甚太夫から魚住まで武将の名前をあげ、「六十三人」とある。本図の書き込み「七百六十三人」は、この「七百余騎」と「六十三人」を足した数字ではないだろうか。そう考えてよいとすれば、「長治記」の数字を足して独自の表現をしたものとなる。単純に「長治記」や「絵解き」を引き写したのではないのである。ただし、この14が治定として良いかが問題であろう。「絵解き」ではこれを吉親とし、「先手の大将別所山城守、二千五百の軍勢を鶴翼（の陣）にそなへ、静まりひかへ玉ふ所（は是）也」と説明する。右幅に全く吉親の姿がないのは不自然であり、14を吉親と解釈した方が自然であろう。また書き込みは15も治定とするが、14が仮に吉親であったとしても大将のすぐ前にもう一方の大将（しかも総大将）を描くのはやはり不自然だろう。14が治定ならば一層不自然である。従って、書き込みが14・15を治忠とするのは誤りではないかと考える。書き込みがどのような考えによって、あるいは文献によって治忠と判断したのかは不明である。また「七百六十三人」の数字でも考証したように、書き込みは他史料を単純に引き写しただけではなく、足し算しただけとは言え、自分なりの解釈をする場合もあり、他史料の内容から自分なりの判断をした可能性もある。

以上のように、書き込みが独自の判断でなされたものがあり、それは結果的に不自然・不合理な内容であった。注意しなければならないのは、その書き込みがいずれも朱筆によってなされたものということである。朱筆と墨筆の関係がまだ明確ではなく、同筆跡であり、ほぼ同時に書き込まれたことも考えられる現状では、朱筆には独自の判断によったものがある可能性を指摘するにとどめなければならない[25]。

むすびにかえて

以上、兵庫県立歴史博物館所蔵「播磨三木城合戦図」の粉本であるという特質を生かして、その書き込みから史料的性格を検討した。いまだ基礎的検討の域を出ないが、検討結果は次のようにまとめられる。

①本図は旧図を写したものである。

②本図の書き込みは「播州」「長治記」「絵解き」などに拠りつつ、特に朱筆部分に独自の解釈をした可能性がある。

③本図の書き込みは人名についてのものが多く、誤字へのこだわり方からすると、本図をもとに制作された合戦図には人名を直接書き込みか短冊に書いて貼り付けた可能性がある。

④朱筆と墨筆の書き込みの関係は不明であるが、両者は同一筆跡で、ほぼ同時に書き込まれた可能性が高い。朱筆を墨筆が、墨筆を朱筆がそれぞれ訂正している。

⑤一部とはいえ、「絵解き」と異なる書き込みがあったことからすれば、本図は「絵解き」が成立した天保一二年（一八四一）より以前、すなわち新図以前に制作された可能性もある。

その他、まだまだ検討すべき問題はあるが、以上をもって基礎的検討を終えたい。

注

1　三木合戦に関する先行研究のうち、近年のものでは宮田逸民「東播磨と三木合戦」（東播磨の歴史を考える実行委員会編『東播磨の歴史2中世』、神戸新聞総合出版センター、二〇〇三年）、『三木城跡及び付城跡群総合調査報告書』（三木市教育委員会、二〇一〇年）、渡邊大門「天正七・八年における三木合戦の展開について」（『十六世紀史論叢』八、二〇一七年）、金松誠『秀吉の播磨攻めと城郭』（戎光祥出版、二〇二一年）などがある。

2　（天正二〇年）五月廿日付浅野長吉・木村重茲宛豊臣秀吉朱印状（『浅野家文書』二五号）

3　松田修『松田修著作集一　刺青・性・死』（右文書院、二〇〇二年、初出一九七二年）

4　小林基伸「三木城の最期について」（『歴史と神戸』五一―四、二〇一二年）。これに対する反論に、岩本晃一「三木落城後の大量殺戮説に対する考察」（『歴史と神戸』五五―一、二〇一六年）がある。

5　この頃の織田権力は裏切り者を許さないのが基本方針であるので、城兵全員が助命されたとは考えにくいが、助命か虐殺かの二者択一で考えるべきではないと思う（堀新「三木合戦にみる古文書・軍記・合戦図の比較研究」、『軍記と語り物』五四、二〇一八年、以下本論文の引用については脚注を省略して本文中に堀Aと略記する）。この点は小林・岩本両氏も同様のお考えであろう。

6　大村由己「播州御征伐之事」（『群書類従』二一輯合戦部）。以下、同書の引用は脚注を省略して本文中に「播州」とカッコ書きする。なお群書類従の底本が必ずしも最善本ではなく、書本を校合する必要があるが、他日を期したい。

7　来野弥一右衛門「別所長治記」（『群書類従』二一輯合戦部）。以下、同書の引用は脚注を省略して本文中に「長治記」とカッコ書きする。なお同書には「別所記」と総称される多くの類似史料があるが（松林靖明・山上登志美編『別所記』、和泉書院、一九九六年）、本稿では便宜上「長治記」を主に使用する。

8　徳田和夫「三木合戦軍図絵解」（林雅彦・徳田和夫編『絵解き台本集』、三弥井書店、一九八三年）。以下、同書の引用は脚注を省略して本文中に「絵解き」とカッコ書きする。

9　二〇一四年四月一七日に行われた絵解きの様子をYouTubeで見ることができる（「法界寺三木合戦絵解き」その一～四、https://www.youtube.com/watch?v=QF3uWOhlQGAなど）

10　前掲註（1）金松著書

11　二〇一六～一八年度科学研究費・基盤研究（B）「戦国軍記・合戦図屏風と古文書・古記録をめぐる学際的研究」（研究代表者・堀新）、二〇二〇～二三年度科学研究費・基盤研究（A）「戦国軍記・合戦図の史料学的研究」（研究代表者・堀新）。その一環として、本研究所の研究助成を受けた次第である。

12　吉澤弥生・奥彩子・堀新「デジタル人文学の研究と教育に関する基礎的研究」（『総合文化研究所紀要』二七、二〇二一年）のうち堀執筆分「3絵画資料のデジタル分析」。以下本論文の引用については脚注を省略して本文中に堀Bと略記する。

13　図1～3は吉岡由哲氏撮影の画像に数字をおとした。

14　この点はすでに前掲註（8）に指摘がある。

15　名古屋市博物館編『豊臣秀吉文書集』第一巻（吉川弘文館、二〇一五年）所収二〇二号文書。以下「秀吉文書」二〇二号のように略記する。

16　前掲註（5）堀論文

17　小林基伸「三木合戦の経緯」（前掲註1『三木城跡及び付城跡群総合調査報告書』所収）

18　（天正六年）四月一七日付別所重棟宛村上頼家・長束承連署状（「清水寺文書」『兵庫県史』史料編中世二）

19　阿部泰郎「三木合戦図」（『国文学　解釈と鑑賞』四七―一一、一九八二年）

20　庵谷巌「鎮魂の絵解」（同『国語科教育学の性格』、明治図書出版、一九八一年、初出一九七五年）

21　前田徹氏（兵庫県立歴史博物館主査・学芸員）の御教示による。本図の閲覧をはじめ、前田氏に大変お世話になった。あつく御礼申し上げたい。

22　後藤捷一『図説三木戦記』（三木産業株式会社、一九六八年）

23　図4・5ともに旧図・新図の画像は法界寺所蔵（みき歴史資料館提供）、本図は吉岡由哲氏撮影、三木文庫本は前掲註22書より

24　藤木久志『城と隠物の戦国誌』（朝日新聞社、二〇〇九年）

25　中幅2の朱筆を墨筆で抹消した部分も、朱筆の内容は誤りである可能性が高い。

〈付記〉
画像の使用にあたり、兵庫県立歴史博物館、法界寺、みき歴史資料館、吉岡由哲氏に御許可いただいた。あつく御礼申し上げる。

An investigation of battle images; military art of The Miki Battle

HORI Shin

The Miki Battle (1578-80) is the beginning of success story of TOYOTOMI Hideyoshi. This battle image describes military art, and is owned by The HYOGO Prefectural Museum of History. Many commentary sentences are written about this picture. Investigating these sentences, it becomes clear that this picture is based on numerous GUNKI MONOGATARI (war chronicles), and original interpretation.